

# 和泉式部集「観、身岸額離、根草、論」

## 命江頭不繫舟」の歌群に関する考察

久保木 寿子

和泉式部集には「観、身岸額離、根草、論、命江頭不繫舟」を四十三首の冠に各一首ずつ配した歌群（岩波文庫本「和泉式部歌集」清水文雄氏校訂・二六九～三一。以下歌番号、本文とも同本に依る）がある。この他にも同集には、百首歌とされる歌群（一～九八）、あるいは「帥宮挽歌群」後半に位置する五十首歌と言われる歌群（一〇一～一〇五九）など、和泉式部の群作行為を示す歌群が幾つか見られ、この「観身……」の四十三首も、そのような群作の試みの一環として捉えられるであろう。<sup>(1)</sup>百首歌恋の歌群及び五十首歌に関しては思う所を述べる機会があり、それらの群作が和泉式部自身の主題を実現する方法として採用されていることを確かめてきた。本稿でも特異な形態を持つこの歌群を検討することにより、和泉式部の群作行為について引き続き考えてみたいと思う。第一項ではこの歌群の主題を検討し、第二項では主題を支える表現の特質を見る。次いで第三項においてはこの歌群の位置を他の群作歌の中に見定め、題設定の特異性からおおよその成立の時期を推定することにした。

「観身……」の詞句は、和漢朗詠集「無常」に所載のもので、広く人口に膾炙していたものらしく、早く永観二年成立の「三宝絵詞序」の冒頭部分にも引かれ、

古人云、事有。身観岸額離、草命論、江辺不繫舟。又世中何賢、朝未多木已幾行船、跡白浪云。唐此朝、物心知人加久曾云。況解深慈、広伊座、仏御教、世皆堅、不事水、沫庭水外景如。汝等悉正、疾厭離心、可成宣。

とある。又枕草子（草は……）などの引く所でもある。

和泉式部集中にこれと同様の詠法がとられた例として、古今集雑下「いかならむ敵のなかに住まばかは世の憂きことの聞えこざらむ」の一部、あるいは「我（<sup>3</sup>）不愛身命」という法華経勸持品の一節を句頭に詠み込んだ歌群がある。古今集の歌も法句譬喩経を踏まえたものと解され、又後者は平安中期の釈教歌に屢々詠まれているものである。例えば寛弘末年成立の発心和歌集は

為説是教故 忍此諸難事 我不愛身命 但惜無上道

うきことをしのひかたきをしのひてもなをこのみちをふしむ  
とめむ

と経旨通りの詠歌となっている。同様の歌は、長能・公任、赤染衛門等にも見られる。

和泉式部の「我不愛身命」の歌群は、「悉正疾厭離心可成」と言われる結論に達するべく展開するのではない。又、勸持品の釈教歌とも異なり、「忍此諸難事」や「但惜無上道」に相当する要素を全く含まない。更に言えは「我不愛身命」と云ふ心を上にはすあて」という詞書にも拘らず、個別の歌はむしろ「不愛」とは逆のころを詠じるのである。

みる夢もかきどころはある物をいふかひなしやはかもなき  
身は(一三九三)

はかもなき露をば更にいひおきてあるにもあらぬ身をいかに  
せん(一三九八)

緒をよわみたえてみだるる玉よりもぬきとめがたし人の命は  
(一三九九)

まぼろしにたとへば世はた頼まれぬなけれどあればあれどな  
ければ(一四〇一)

右の四例は、はかなきものとして夢・露・玉・幻を挙げ、より一層はかない命・身を対置させている。傍線部分は詠者の心情、判断に係わる部分であるが、無常を認識しつつ如何ともしがたい状態を観念的に表現するにとどまり、「不愛」という心境には決して至りえていない。

をしまれぬかたこそありけりいたづらにきえなん事は猶ぞ悲  
しき(一三九七)

右の一首が「不愛」の意味を上句にかろうじて詠み込んでいるが、下句は全く逆に展開し「いたづらに消え」る事を「悲しき」と捉える。他の諸例も同様に身命のむなしさをかなしむ歌である。釈教の歌でないことは勿論、この歌群はまた「我不愛身命」という経文自体の意味とも逆の所で主題を展開させていると思われる。

「観身……」の歌群を検討するに際しては、この「不愛……」歌群が有効な分析基点となるようである。両歌群には極めて類似した発想、表現を持つ数首が指摘しうるのでその点から考えていく。

Aみる程は夢もたのまるはかなきはあるをあるとて過すなりけり  
(「観身……」一三六九)

A'みる夢もかきどころはある物をいふかひなしやはかもなき  
身は(「我不愛……」一三九三)

Bはかなくてけふりとなりし人により雲のくものむつまじきかな  
(二七四)

B'ちかくみる人も我が身もかたがたにただよふ雲とならんとす  
らん(一三九六)

C緒をよわみ乱れておつる玉とこそ涙も人のめにはみゆらめ  
(二八三)

C'緒をよわみたえてみだるる玉よりもぬきとめがたし人の命は  
(一三九九)

D 命だにあらばみるべき身のはてをしのばん人もなきぞ悲しき

(二九一)

D' 我を人なくはしのばんものなれやあるにつけてぞうきもうき

かし (一三九一)

E をしとおもふ折やありけむありふればいとかくばかりうかりける身を (二九四)

E' をしまれぬかたこそありけりいたづらにきえなむ事は猶ぞ悲

しき (一三九七)

最初の例の場合、歌い出しの語「見る」が同一である上に、全体の心情内容及び表現が共通している。A が「たのまる」「過す」と動詞による表現であるのに対し、A' は「かかりところ」「身」と体言でまとめることから、A' の方が観念性の強い印象を与えるものとなっている。このような傾向は両歌群全般に渡って言えることなのである。又 A' が「ある物を……なしや」と「有」「無」を対比的に折り込む技法をとるのに対し、A は「あるをあるとて」と表現する。「在るを有るとて」であろうか、語は抽象度の高いものであるが、詠者の認識の具体的様相を説明しようとするものである。

次に B、B' の場合、雲に寄せた無常の歌という点では共通したものを感ぜさせるが、B' が「ちかくみる人」の存在を明示し、「ただよふ雲」となることをあらかじめ予想して、そのはかなさを詠出するのに対し、A は「人」が既に「けふりとなりし」と詠じられ、予想ではなく現実にはかなさの真只中にあることの詠となっている。

C、C' の例は、最初の例と同様、頭の「を」音が共通で、類似性が強い。後者の概念的であるのに対し、泣いている詠者を想起させる点、前者は具象性を増すが、常套的ではある。

D、D' の場合、D' では「人」も「我」も現存しているが、D の「人」は「な」いのであり、B、B' の例と同様、両歌群の背後の生活体験自体に決定的な違いが生じていることが窺われる。時間の経過が感得される部分である。

E、E' も「を」音が共通するところから、一見同趣の設定になっているが、その言わんとするところにはかなりの径庭がある。即ち、B' はその題詞の「我不愛身命」の意味を一応受けとめた上で、やはりそれに徹しきれずに身命を惜しいと思ひ、悲しいと詠じる。これに対して E は、そのような身命への執着が今は納得できないというのである。従って E' が「不愛」を題としながら、それとは逆に展開する心情を詠じたのに対し、むしろ E' の方が「不愛」の心境を詠じている。E は「不愛……」歌群の主題を対象化しうる時点で詠じられたものと考えられるのである。E' のような題詞の受けとめ方は、先述の通り、「不愛……」歌群全体に渡って認められる特徴であった。ここにも両歌群の観照の度合の差が顕われているように思われる。

以上のように「不愛……」歌群と対比させてその基本的な構造を考えると、「観身……」歌群は、かなり明確に「不愛……」歌群を念頭に置き、その展開として構想されていることに気づく。肝要なことは、個々の例で指摘したこれら時間的側面での変化、観照態度の深まり、あるいは表現の具象化傾向などが、「観身……」

…」歌群の中で相互に不可分に結びついており、それは歌群を構成する態度の一貫性を示すものに他ならないということである。従って「観身…」歌群は主題的にも一貫したものととして扱いうると思える。

二つの歌群の対比から「観身…」歌群の輪郭を辿ってきたが、では「観身…」の統一的主題はどの辺に求められるのであるうか。四十三首に立ち返り検討をすすめたい。

この歌群には、他者の存在を示す「人」という語が十四首（約三分の一）に渡って使用されている。次にそのすべてを掲げる。

1をしへやる人もあらななつねみん吉野の山の岩のかけみち

(二七〇)

2はかなくてけふりとなりし人により雲ゐのくものむつまじきかな (二七四)

3きえぬともあしたにはまたおく霜の身ならば人をたのみみてまし (二七五)

4人とはばいかにこたへん心から物おもふ程になれる姿を (二八〇)

5にはのまもみえず散りつむ木の葉くづ掃かでもたれの人かきてみん (二八一)

6緒をよわみ乱れておつる玉とこそ涙も人のめにはみゆらめ (二八三)

7たらちめのいさめしものをつれづれと眺むるをだにとふ人もなし (二八七)

8瑠璃の地と人も見つべしわが床は涙の玉と敷きに敷ければ

(二八八)

9命だにあらばみるべき身のはてをしをしのばん人もなきぞ悲しき (二九一)

10野邊に出づるみかりの人にあらねどもとりあつめてぞ物はかなしき (二九二)

11ほどふれば人はわすれてやみにけむ契りしことを猶たのむかな (三〇一)

12りんだうの花とも人を見てしがなかれやははつる霜がくれつつ (三〇三)

13類よりもひとり離れてしる人もなくくこえん死出の山道 (三〇九)

14ねし床に魂なき骸をとめたらば無げのあはれと人もみよかし (三一一) (\*清水氏校訂本「ら」)

右の中で10は「とりあつめて」を導くためのものでさしたる意味はない。又、3と12は「人を―たのみみてまし」「人を―見てしがな」という形をとり、詠者が他者をこう見たいという、不可能を承知の願望を示している。一般的意味でも解しうる「人」である。

その他の大多数の歌が問題としているのは、自己を認識してくれる存在としての「人」であり、その有無である。5「たれの人かきてみん」、6「人のめにはみゆらめ」、8「人も見つべし」、14「人もみよかし」等の歌には共通して「見る存在」としての他者と、「見られる存在」としての自身があるわけで、両者の係わりが対象化されて一首が構成されていると考えられる。同様に13

では自身を「知る」存在としての他者、4では「とふ」他者、9「しのぶ」他者がそれぞれ設定されている。詠者は、自分自身を「見てほしい」し「知ってほしい」「しのんでほしい」のである。他者に係わるゆゑに「雲のくも」までが意味を持ち、それと係わらないすべては意味を失うのであり、言わば「見る存在」である他者の存在を媒介にしてはじめて自身の存在を明確に認識するという体である。

このような他者との係わりは、他者に対する直接の願望の形（不可能な願望ゆゑに仮想の形をとる場合が多い）をとるものと、他者の非在に対する悲嘆を表面に出した形のものとの二様の表出方法で示される。4「人とはばいかにこたへん」、8「人もみつべし」、14「人もみよかし」等は前者の例となろう。これらの歌で詠者は、実際には眼前に居るのではない他者との係わりの場面を想定し、その中で迷い、願望する。仮想の裏に、求めてやまない他者の非在がありありと感得される詠じ方である。後者の例としては、5「掃かでもたれの人かきてみん」、7「眺むるをだに問ふ人もなき」、9「しのばん人もなきぞ悲しき」、13「知る人もなくなくこえん」等がある。

「人」の語を一首中に詠じ込まなかった為にこの十四例には入ってこないが、

たれかきてみるべき物とわが宿の蓬生あらしふきはらふらん

(二七九)

ちりのある物とまぐらはなりぬめりなのためかはうちもは

らはん (二九三)

なども、他者の非在により意味を失った諸々の事象を主題に詠じているとみられる。

以上のように、いずれの表出方法にせよこの歌群は、他者の非在に対する悲嘆を根底に持っている点において統一的に把握できると思われる。そのような悲嘆の裏には、強烈な他者への希求があり、その希求が不可能であることも詠者は認識している。

題詞の「江頭不繫舟」に見られる「舟」を素材とした次の二首は、他者の非在の結果紹来された自身の寄るべない心境の形象である。

なにはがたみぎはの蘆にたづさはる舟とはなしにある我が身

かな (二八五)

櫓もおさで風にまかするあま舟のいづれのかたによらんとすらん (二九五)

ここで「不繫舟」とは即ち、他者を失った自分自身である。

ところでこの題詞は、例えば日本古典文学大系『和漢朗詠集』補注に示された川口久雄氏の訳によれば

この人間の身をせずかに考えてみると、あやうくたのみがたいことは、ちょうど岸の片すみ根を離れかけた草の一筋みたいなものだ。この人間の寿命を考えてみると、はかなくさだめないことは、ちょうど川の流れのほとりに繋いでいない一艘の小舟みたいなものだ

となる。草あるいは舟は、人間の身命のはかなさの比喩であり、和漢朗詠集の「無常」に適ったものである。題詞によるならこの歌群は「無常感」を詠じたものということになるであろう。

きえぬともあしたにはまたおく霜の身ならば人をたのみみて  
まし (二七五)

つゆをみて草葉のうへとおもひしは時まつ程の命なりけり

(三〇五)

歌群中の右の二例などは、題詞そのものの意味するところに適ったものであり「無常感」の歌といえるであらう。

しかし、今見てきたように、この歌群を統一的に把握する視点として、詠者の他者に対する係わり方を考えるなら、この「無常感」なるものは、もう少し具体的に、他者の非在に対する悲嘆、そこから生じる孤独感に近いものとして捉えられるであらう。が、「無常感」と「孤独感」は恐らく対立する概念ではない。この歌群に見る限りでも、他者の非在に因る孤独感は価値の喪失感に結びつく傾向が見られ、それは無常感に至る一階梯と見做されるからである。詠者の「無常感」へのアプローチは、右のような他者の希求とその断念の中で果たされたものようである。

## 二

この歌群が、一挙に「無常感」の歌を詠じることをせず、その前段階とも言える他者への希求と、その非在に対する悲嘆を繰り返して詠じたことは、表現の側面から見た場合にも、この歌群を特徴づける結果になっている。即ち「無常感」の歌として観念化する恐れのあるところを、詠者は一首の中に他者を設定することにより、自身の悲嘆を他者との係わりの中で具象的に表出しようとする。又他者―「見る」他者、「知る」他者―の視点の導入は、

詠者の状態を被写体とでも言うべき対象物へと変化させ、その孤独を客観的に形象づける。

次の三例につき、それらの点を具体的に見てゆくことにする。

① たちちめのいさめしものをつづれと眺むるをだにとふ人もなし (二八七)

② 類よりもひとり離れてしる人もなくこえん死出の山道 (三〇九)

③ ねし床に魂なき骸をとめたらば無げのあはれと人もみよかし (三一一)

①の「たちちめの……」の歌は、拾遺集恋四の次の歌に依拠したものとされる。(古今六帖にも所収)

たちちねのおやのいさめしうたゝねは物思時のわさにそ有ける

拾遺集歌が平板であることは一見して明らかであろう。上二句は拾遺集の場合「うたゝね」の説明になっているが、和泉式部の歌ではここで切れ、過去の情愛に満たされた状況が詠嘆的に回想され、それと対照的な現在の自身の状態が下句として導かれる。

「眺む」という動態で示された自身は、結句前半の「とふ」という語で、他者の「問う」行為の対象物として封じこめられる。そして「人もなし」と続く後半の語によって、「問う」はずの「人」と共に更に客体視される。

②「類よりも」の場合も、「知る人」という他者の設定がなければ、単に自身の死後の仮想に終るところを、否定の形ではありながら、明らかに知るべきはずの人を用意することにより、その

假想を立体化する。ここでも詠者が「なくなく越えん」と具象的な動作で示されていることが一首の場面性を高めていることに注意したい。全く假想された一首の中で、泣きながら死出の山道を越えている行為者としての詠者と、そのような一つの場面を知るべき人がいないと認識し詠ずる主体とがあるわけで、「知る人」の視点を設定することにより、この行為者と詠者は決定的に分断される。それは「知る人もなく」と打ち消す形のこの例よりも、「みよかし」とする③の例でより明確に捉えられるであろう。

③「ねし床に……」の歌も②の例と同様、假想の場面を設定する。骸となって横たわる行為者としての主体と、それを一場面として「みる」人の視点が用意され、更に「みよかし」と強調する詠者の直接的視座が詠出される。他者により対象化される自身を、その他者をも包括して更に対象化・場面化するような構造になっている。このような表現の構造は、全く假想するしかない死後の場面に於いても、他者との係わりに依って自己を位置づけずにはいられない詠者の主題が紹来するものであろう。

又、自己の行為を「魂なき骸をとめ」と把握するのは、「眺む」や「なくなくこえん」程には動的な状態を示すわけではないが、意味するところはより極限的状况での行為である。骸を代償に「なげのあはれ」を求める詠者の心情は、心理表現を捨象したところに即物的に具象化される。

「なげのあはれ」は、設定した「人」の心に生起して欲しい感情を、詠者が「人」の心中思惟の形で假想し表出したものである。詠者の視点は設定した他者の視点に入りこみ、自己の骸を見、

「なげのあはれ」を言わせるのである。<sup>(5)</sup>

①②③の例に顕著に示された表現構造上の特徴は、言うまでもなく詠者の対象把握の態度の独自性と緊密に絡みあっているのであるが、それは必ずしもこの歌群にのみ見られるというのではなく、和泉式部集に散見されるものである。「観身……」歌群は、他者との係わりから生じる自身の孤独が主題に据えられた歌群だけに、そのような対象把握の独自性が際立って表現面に出ているものと思われる。

又、同時に指摘してきた表現の即物性、具象性も、今見てきた「対象の被写体化」に付随して生じる現象であろう。見られる存在は常に視覚的に明瞭でなければならぬ。「つれづれと眺むる」自身の姿は、「とふ」はずの人にとって明瞭な状態で在る必要がある。「み」られる自身は「骸」としてはつきり「とめ」られなければならないのである。

ともかくもいはばなべてになりぬべしねになきてこそみせまはしけれ (一六三)

衆知の一首だが、ここには和泉式部の表現に対する根本的認識が余すところなく言われている。自身の横溢する感情を如何に表現しようと、言語に捉えられる瞬間、それは「なべて」のものとして凍結されてしまう。生動する心の有様をそのままに表出する術としては、感情あるいは心理の表白を断念し、ただ自身の「泣く」行為に依るしかないのである。このような認識は、見てきたように、具象的、即物的表現として数首の和歌の上に顕現している。言語の二重構造的機能にさして依拠せず、言語本来の一次

的機能で直載に、情感をではなく様態そのものを描く方法が志向されているのである。

### 三

以上のような主題と表現を持つ「観身……」の歌群を、和泉式部の他の群作歌との係わりの中で位置づけておきたい。

百首歌恋歌群の主題と方法については、その対象把握の能動的態度から「人を思ふ」という主題において一貫したものと見、主題形象の方法として、古今六帖の分類題が意識され、表現の客観化が意図されていると考えた。又、五十首歌については、帥宮哀惜という主題が、時を示す歌題の意識的設定により果たされていること、その際の対象への係わり方は、五つの小歌群の後半に行く程、客観的に把握され自ずと継時的構成を形づくっていることを指摘したのであった。

これらの歌群の中に「観身……」の歌群を置いてみる時、まず対象把握の態度の著しい相違に気づく。百首歌恋歌群は「人を思ふ」という語で主題を統括してみたように、詠者の視覚が常に対象である他者に能動的に向かっていた。五十首歌もまた、帥宮哀惜というこれも対象への率直な感情表白を出発点としていた。これに対して、「観身……」歌群で設定された「他者」は、それ自体が詠歌の目的たる対象ではない。その「他者」の非在を通して詠者自身の孤独が照射されるのであり、詠者の視覚は最終的には自己自身に向けられる。主題ははつきり孤独な自己の状況表出へと転換しているのである。

自身に回帰し述懐する目は、仏教的要素の多少、他者との係わりの深浅の度合の差はあっても、「いはほのなかにすまばかは」の歌群や「我不愛身命」歌群の中にも見られるものである。和泉式部の群作歌の中でもこの折句的手法による歌群は、定数歌的形式を持つ歌群とやや異なり、述懐性の強い主題と結びついているようである。

昂揚した気分を抑え、むしろ沈鬱な情調を持つ「観身……」の歌群は、見てきたような自己対象化の方法により前記恋歌群・五十首歌に比べ一段と客観性を増した表現になっている。和泉式部の群作歌は、日常生活から生じた種々の情感を整った表現のままに埋没させてしまうことに抗してとられた営為であり、実情を客観化する為の試みとして捉えられると思うのだが、客観化の試みは多様であり、一概に比較しうる性質のものではない。が、敢えて言えば、自己と他者の係わりそのものを対象化するこの歌群に、手法上の複雑化をよみとることが可能ではないだろうか。

五十首歌後半で、対象への能動性、気分の昂揚が沈静してくる中に

まどろまであかしはつるを寝る人の夢に哀れとみるもあらなる  
(一〇四八)

の一首を拾うことができる。五十首歌は、最後の小歌群で回想性を強めながら歌群を収束させるが、右の一首の延長上に、より内省化した形で自己対象化の方法を展開する「観身……」の歌群があるのではなからうか。

専ら、作品内容に即して主題、表現の変容を歌群間にさぐって



きたのであるが、最後に「観身……」歌群の成立時期を推定しておかなければならない。

先学の成立に関する御論は、三つに大別されるようである。森本元子氏は、この歌群を「無常感」を中心主題として、一回的に成立したものとされ、その時期を帥宮敦道親王の一周忌頃（寛弘五年十月）に推定される。又、佐伯・村上・小松氏「和泉式部集全釈」は、二期に渡る成立を想定し、為尊親王薨後（長保四年）の十月成立の部分と、後に詠み継がれた部分とがあると論じられる。更に下って和泉式部晩年にその時期を求められるのが、清水文雄氏他の諸氏である。

「観身……」歌群の成立を考えるに際して、先に内部徴証から恐らくはこの歌群に先行するであろうとした「我不愛身命」歌群を、再びとりあげることになる。

「我不愛身命」歌群は、先述のように法華經勸持品の一節である。和泉式部の場合、経文は単純に題としてあるのではなく、句頭の音を規定しつつ主題に係わるという意味を持っている。このような変形とも言える手法は、経文を題として設定することがある程度定着した後にして、はじめて可能になると考えられる。

本朝文粹卷十一「讀法華經二十八品和歌序」（勘解相公）

……所詠謂什 多存人口 雖有風雲之興 未以法花為題 爰自從仙院 松桂風咽月弔 左相府怨恩之思 猶滯肝膽 偏掃妙法口誦手書 左右金吾 兩納言 親衛大丞 兩相公皆仙院之旧臣 為相府之骨肉 顧相語曰 時風詠陰 人罷宴樂 春花秋月空有棄置之愁 詩闋琴台 幾含寂寞之恨 願採法花之品 將播詩林

之題 只探真実 不愛浮花 羣卿唯然 各成隨喜……  
右の序によれば、この時初めて「法花之品」が題として設定されたことになる。「権記」長保四年八月十八日の記事に依れば、この日

……詣左府有廿八品和歌之事大弼作序入夜罷出  
と、先の本朝文粹所載の序に符合する事実のあったことが解る。

拾遺集最終巻に採録されたような意味での仏教的色彩の強い和歌は、長保四年以前からも当然詠じられていたであろうが、設題という形で経文が採りこまれることは意味が異なる。経文を題とすることが隆盛して後、はじめてその変形とも言える折句的題詞が設定されたとすれば、「我不愛身命」歌群は、当然長保四年八月以後の成立になる。「不愛……」歌群が成立し、更に「観身……」の歌群が展開されたと考える時、経文題の変形に想到するまでに要する時間及び両歌群の質的变化を醸成するに足るだけの時間として、『和泉式部集全釈』に言われる為尊親王没後の長保四年十月までの二ヶ月間の期間は短かすぎるように思う。

今は仮に「不愛……」歌群を帥宮存生中(9)のもの、「観身……」歌群をその没後のものと推定し、両歌群の展開の契機として帥宮の死（寛弘四年十月）を据えておきたいと考える。前夫橘道真との係わりをも含めて、帥宮没後にもたらされた空漠とした思いを主題として対象化するに至った時期、帥宮挽歌群の成立より更に後の時期を考えたいと思う。

晩年説については、寺本直彦氏が、源氏物語との影響関係を通じて疑問を提しておられる。私も和泉式部の諸群作が初期百首歌

の色濃い影響下にあり、「親身……」歌群にも又反映していることから、群作行為そのものが生涯に渡る行為であったかどうか疑問を抱いている。が、今は成立下限については不明と言うしかない。

和泉式部集はその内部に大量の贈答歌を含み、詞書があつてす  
らなお寂然としない歌も多い。その意味では「文学として独立性  
の乏しい」「生活環境を顧慮することなしには各々の和歌を理解  
することができない」この期の和歌の特徴を持っている。又何よ  
りも日常生活から生じた情感に基づく形象である点において、ま  
さにこの期の和歌なのであり、これは見てきたような群作歌につ  
いても言えることであらう。ただ群作歌では、生活から生じた情  
感が、その情感が非常に固く強靱なものであったがゆえに、主  
題の形にまで高められ、一首としての独立性が求められたのであ  
った。主題に適う「題」の設定あるいは音の規定は、客観表現の  
為の外在的契機として用意されたものではなからうか。

和泉式部が主題としたような分野は、和歌史の流れの中でも客  
観化の遅れた部分であつた。それは恋題の形成、分化が遅れるこ  
と等から検証されるが、和泉式部の群作行為の中には、主題性の  
追求と共に、実情の客観化への志向が根強く息づいているように  
思う。それは、あくまで実情表現の為の志向であつたが故に、直  
線的に中世的客観表現への方向を辿ることなく、むしろ場面性の  
形成へ、物語的構成へと進んだもののである。

注

(1) 重複歌が三六八／三九九にあり(十一首を欠く)、本文の異同が多い。これを草稿と見る説もあるが、今は誤脱の少ない二六九／三一一の本文に依る。

(2) 拙稿「和泉式部百首恋歌群の考察」(『国文学研究』第69集 S 54・10)

同「和泉式部統集『五十首歌』の考察」(『今井兼朝博士物語・日記文学とその周辺』)

(3) 前者一四四二／四五三

後者一三九一／一四〇二

(4) 和泉式部の措辞の抽象性については寺田透氏に御指摘がある(『和泉式部日本時人選8』)。語の抽象性は必ずしも表現全体の抽象性を意味しないと思われる。例えば氏の例示された「なげのあはれ」は、和歌文脈の上では「一」とひとみよかし」と続き、設定された他者の心内語的役割を果たしている等。

(5) このような対象把握の態度は、「和泉式部日記」に見られる視点の転換に通じるところがあるのではなからうか。

(6) 森本元子氏「和泉式部の作」『親身岸頼離根草』の歌群に關して(『武蔵野文学』19 S 46・12)

季を十月と限るのは歌群中の「神無月」等の用例によるもの。

(7) 清水文雄氏「和泉式部」(日本歌人講座『中古の歌人』)

岡崎知子氏「和泉式部の宗教的心情について」(『平安朝女流作家の研究』)等。

(8) 大日本史料は権記同日の記事の後に、この二十八品和歌序を併載している。高木豊氏『平安時代法華仏教史研究』(第五章法華経和歌と法文歌)は、法華経歌の成立と展開を論じ「法華経歌の歴史は道長発起のこの歌詠によって一時期を画した」とする。

猶、二十八品和歌の勅撰集入集は後拾遺集から。源信の二十八品和歌が「千載集」以下の勅撰集に入り、又「袋草子」が「サテ、廿八品并十奏歌ナドモ其後説給云々。」と載せるが、同時代の資料には確認されず、「題」設定の形で詠じられたものとは考えられない。

(9)

「帥官の宗教的心情については森田兼吉氏に詳論がある。『教道親王の無常感と宗教的心情』(『日本文学研究』13 S 52・2)

為尊親王、東三条院詮子と相次ぐ親近者の死に加え、第二次勸学会が中興されるような時代的要因もあり、その仏教への傾倒は深いものがあつたと思われる。和泉式部集中の「帥宮にて題十給はせたる」という詞書を持つ十首(三五五〜三六四)にも、題の要請しない宗教的心情が色濃く表出されており、両者の共通理解とでも言った背景を推測させるものとなっている。

(10)

長保五年末(式部の南院入)、寛弘元年道貞の陸奥下向

の頃が決定的離別の時期とされる。

(11)

「源氏物語と同時代和歌との交渉」(『源氏物語・枕草子研究と資料古代文学論叢第三輯』)

(12)

好忠・源順らの影響は形態あるいは語句の摂取のみに限らない。「類よりも……」(三〇一)が好忠百首中の「類よりも独り離れて飛ぶ雁の友におくるわが身悲しな」と初二句が全く同じである他、好忠毎月集の冬の素材がかなり用いられているようである。「さをしかの……」(二九〇)が毎月集「風はやみ妻恋ふなりし鹿の音をなどわがうへと思はざりけん」、「外山吹く……」(三〇二)が「端山(イ外山)なる柴のたち枝に吹く風の音きくときぞ冬はものうき」、「緒をよわみ……」(二八三)が「乱れつつ絶えなば悲し冬の夜をわが独り寝る玉の緒弱み」と素材を同じくするように。他にもあるが省略。

(13)

宇佐美喜三八氏「藤原公任の歌―寛弘期の和歌の性格―」(『和歌史に関する研究』)